

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

資産を費用と見なす時

(「バランスシート不況」の裏表)

バランスシート不況 バブルの崩壊が明確となった93年頃から、この妙な言葉がマーケット周辺で語られるようになった。巨大な資産デフレの波は、企業部門、家計部門、そして政府部門のバランスシートを直撃する。そのバランスシートを建直し健全化するには、膨大な時間と労力、そしてコストを要す。従って、今回の不況は簡単には回復しない。そんな説明だったと思うが、昨今の状況を見ると正にその説明通りになったと云うべきか。

云うところのバランスシート不況には二つの側面がある。一つは、投下した資本によって獲得できる利益が、投下資本に対して余りにも小さいということがある。それは、資本の生産性(資産利益率=ROA)が低くなるという形で現れる。

もう一つは、資産と負債・資本のバランスが崩れるという側面である。調達した負債や資本は減価しないのに、資産価値が著しく劣化してしまう。バランスシートが文字通りバランスを失ってしまうのだ。

10年前から、多くの企業、個人、そして政府部門がこの二つの問題に苦しめられてきた。当然ながらこの問題と無縁だと断言できる中小企業経営者は、おそらく少ない筈だ。

企業部門のバランスシートは、簡略化すれば下図のようになる。

投下資本	現金	負債(A)	調達資本
	資産(C)	資本(B)	

企業では、調達した資本(A+B)を使って(投下して)事業を営む。そして調達した資本に見合った利益を稼ぎ出すことが求められるのが、私達が住む資本主義社会の経済原則である。この場合、複式簿記に従えば「資産(C) = 負債(A) + 資本(B)」となる。しかし、バランスシート不況はこの原則を壊してしまった。そしてその崩し度合も生半可なものではない。

上図で云えば、資産(C)の価値が帳簿上だけのものとなり、本来であれば「 $(C) = (A) + (B)$ 」であるべきものが「 $(C) < (A) + (B)$ 」という不等式となってしまった。その結果バランスシートへの信頼性が失われ、会計原則そのものに疑念が生じるようになった。

そして更には、投下された資本(C)に対して企業が獲得する利益の割合が極めて小さくなった結果、資本主義の経済原則が歪んでしまった。通常の経営努力を積み重ねるだけでは、負債(A)を適正值に戻すのが殆ど困難な状況に陥ってしまった。

この隘路は脱け出さなければならない。脱け出さない限り、云うところのバランスシート不況は終わらない。どうすれば良いのか。原因は判っている。だから原因を取り除けば良い。言葉で云えばそうなる。だがその原因を取り除くのは簡単ではない。大きな困難が伴う。それは負債(A)を大胆にカットするしか方法がないからだ。

負債のカットは、この経済社会では倒産という形で行われるのが通例である。それ以外の方法ではモラルハザードという難しい問題が発生する。今日本が直面している問題は、このモラルハザードを回避しながら、負債をカットし資本の生産性を高めることにある。とすればこの問題は、方法的にはおそらく国家的なプロジェクトで解決するしかないように見える。

とは云え、企業経営者は調達資本と投下資本に対する考え方に修正を加える必要があるのではないだろうか。もう一度左図を見て欲しい。資産(C)は、名前こそ資産と呼ぶが企業経営にとっては費用であると認識すべきではないだろうか。現金を除いた投下資本、とりわけ資金回収に長期間要する資産(土地や建物等の固定資産)は費用なのだ。資産と認識すれば何か価値ある実体のような幻想に囚われかねないが、費用と認識すれば無駄な投下は抑制する方向に働く。会社の土地も建物も、社長が使っている車も、あるいは機械器具も全ては費用なのだ。

もちろん商法や税法に基づく制度会計ではそんな考えを容認する訳もない。でも制度はどうであれ、失敗の歴史から何かを学ぶとすれば、その一つに「会計上の資産は費用であると認識すること」があるように思うが、いかがだろうか。